

# サステナブル時代の日本壁のために 既存壁や壊れた壁から得られた知見を伝承する

豊田保之（トヨタヤスシ建築設計事務所代表）

## 「日本壁は、伝統的にどのような手法で造られてきたのか？」

この謎を解くためには、既存の壁や壊れた壁を調査し記録することが重要な鍵となる。我が国では、まだ十分使える古家を壊して新築を建てる傾向にある。理由は、劣化状態や耐震性、暑さ寒さなどがあげられるが、時代性や国民性も起因しており、古い家をリノベーションして住むという時代が主流になるのは、もう少し先になりそうだ。一方で、「伝統を知る」という点からは、すでに秒読みが始まっている。古家が、次々に壊されるとともに、伝統的に行われてきた造り方や手法が一瞬で消え去り、かつ、その伝統的な手法に問題があったのかどうかを検証されないまま記憶から消去されている。果たしてそれで良いのだろうか疑問を呈しつつ、いくつかの事例から日本壁の考察を行ってみることにする。

最近の趣味は、壊れた日本壁を見て歩くことだ。旅行や現場への往路、インスペクションなど、壁に注目していれば、必ず何かを発見できる。昨年発見した壁で一番驚いたのは、高級住宅街の中心部で、木ズリ漆喰でできた塀、それも縦張りの木ズリを発見したことだ（01）。この塀の故障の原因は、木ズリと構造体との接合方法であり、横貫が雨水により腐食してしまったことで、縦張りの木ズリを崩落させてしまったようである。漆喰と木ズリとは、剥がれて朽ち落ちるような状態ではなかったため、縦張りでも付着力は思いのほかあるようだ。

[01] 神戸で発見した木ズリ漆喰。



出石町にある建物の土壁では、わら縄の有無や量について、興味深い発見ができた（02）。この土壁は、竹小舞に巻くわら縄が極端に少ない。土が剥がれ、風化と共に縄がなくなったようであるが、それでも縄は少なめである。そして、外部を大壁にするために、柱に竹を釘で打ち付けている。この土壁崩落の原因は、おそらく外灯がきっかけであり、この外灯を取り付けたことで、雨水が壁に侵入し周囲を崩落させたと考えるのが素直な見方だ。土壁の天敵は、やはり雨水だということを確認できる。

次は、築100年の古民家を改修した際の発見である（03）。天井を撤去すると、土壁は天井までで止まっており、かつ、片面しか塗られていないことがわかる。現在は、耐力壁として効果を発揮させたいがために、内壁でも梁まで土壁を上げることが一般化されているが、そういった効果の知見や法律がない時代は、天井裏まで塗籠るのは経済的な点から行われてこなかったようだ。これは、土壁でできた家を調査すると、多くが同様の塗り方になっているのでよくわかる。さらには、この古民家では、貫に小穴を開けて、わら縄を編みこみ土の剥がれを防いでいたことがわかる（04）。単純に貫にわら縄を巻くだけでは、ゆるみがあると判断したためなのか詳細は不明であるが、何かしら上等な仕事をした形跡を垣間見ることができた。

大阪で古家を調査した際に発見した竹小舞土壁は、荒土を「横竹面から塗るのか」、「縦竹面から塗るのか」どちらが伝統

[02] 出石町の土壁。大壁でありわら縄が少ない。



的に行われてきた手法なのかを知るために参考になる（05）。土壁が完成した時点では、どちら面から荒土を塗っているかわからないが、この土壁は小屋裏を片面塗りとしているため、縦竹面から塗っていたことがわかる。一方、先ほどの古民家の土壁（岐阜）は、横竹面から荒土を塗っており、地域による違いのようにも思えるが、調査棟数が少ないため、確証には至っていない。ただ言えることは、同じ地域であっても、職人によってどちら面から塗るかは意見がわかれるということである。

最後は、京町家を改修した際の事例で、漆喰を塗り替えたケースである。元々ある漆喰壁に新たに漆喰を塗る場合はどうしても喰らいつきが悪く、経年変化で剥がれが生じている（06）。剥がれた漆喰の断面を見ると、元々の漆喰壁と新たに塗った下塗り土との接着力が弱かったようだ。ただ塗り替えた漆喰は、土が乾くまでに上塗りを行う「追っかけ」という手法のおかげで、土と漆喰の喰らいつきが良く、この間での剥離は起こっていない。また、土を塗ることで、元々の漆喰壁からでる灰汁を防ごうとした職人の思いが伝わった仕事であった。

## まとめ

いくつかの日本壁を紹介したが、外部の壁で共通している故障の原因は、やはり「雨水」である。雨水が侵入したことで、壁が崩壊している事例が多く、中には人為的に起こってしまった故障もある。雨水の侵入がない場合は、異素材間の付着が原因のようであるが、「追っかけ」という手法により、職人も剥がれを防止する措置を常に考えてきたということが推測できる。いずれにせよ、限られた素材しか選択できない時代があり、その中で最大限の工夫をしていた職人の技術と知恵が壊れた日本壁から垣間見れた。

伝統を本当に伝承していきたいのなら、今すべきことは、現存する古家を壊さず残し、生かすことが重要である。もし、壊すのなら詳細な調査を行い、記録をとることが未来への伝承へとつながるのではないだろうか。

[03] 岐阜の古民家。天井裏は、土を塗らない。



[04] 貫に穴を開けわら縄を編みこんだ事例。



[05] 片面土塗り。縦竹面から塗っている。



[06] 漆喰を塗り重ねた際の剥がれ。



豊田保之（とよだ やすし）

1974年京都市生まれ。大阪芸術大学芸術学部建築学科卒。瀬戸本淳建築研究室、Ms建築設計事務所を経て、2005年トヨタヤスシ建築設計事務所開設。トヨタヤスシ建築設計事務所代表。代々続く左官職人の家に生まれた経歴から、土壁や漆喰など左官職を生かした家づくりを行っている。受賞歴に、第5回サステナブル住宅賞 国土交通大臣賞、第1回環境配慮建築物優秀賞など。

